

シャーロック・ホームズの成功の秘訣

名探偵の人生訓

デヴィット・アコード 著

大原千晴 訳

四六判・210頁
本体1,600円＋税

[評者]

石澤季里



ホームズの名言から知る

原作者ドイルの人生訓

誕生から100年以上の月日を経て、今なお、絶大な人気を誇る名探偵シャーロック・ホームズシリーズ。その人気は衰えることを知らず、つい最近もベネディクト・カンバーバッチ主演の映画が公開されたり、三谷幸喜演出の人形劇がNHK総合TVで放映されたりと、手を替え品を替え描き続けられています。

食文化ヒストリアンでもある本書の翻訳家、大原千晴氏は、ヴィクトリア時代のミドルクラスの食卓について調べるなかで、偶然、この1冊と出会ったのだといいます。

「イギリスでは、現代でも主婦の間で『ミセス・ビートンの家政術』が手引きとして用いられています。著者のイザベラが短命だったにもかかわらず、この本は長命なんです。そして、その影の仕掛け人である夫が編集に携わっていた『クリスマス特別年鑑』に、なんと、ホームズシリーズの第1号目『緋色の研究』が収録されていたんです！ それを知ったときは大変な衝撃を受けました。なぜって、ヴィクトリア朝の名著が2冊とも同じ編集者によって誕生していたとはね。そして、双方が脈々と読み継がれているんですから。」

作家である前に、英国初の眼科医であったドイルは、本書第9章で書かれているように、何のコンネもない底辺から「好きこそものの上手なれ」を座右の銘に、「作家こそ天職」と信じてホームズシリーズの56の短篇と4つの長篇、その他、科学から心霊現象まで、多方面にわたる小説を35篇、その上、南アフリカのボーア戦争のルポを含む12篇のノンフィクションを生み出しました。このあたりの苦労話は第2章、第3章にたっぷり書かれていますが、名探偵シリーズの大ヒットの陰に、他の名作が埋もれてしまったという、作家の複雑な心の内もあったようです。

また、本著では、多趣味で並はずれた行動力の持ち主だったドイルが、心霊現象にはまったり、探偵業に手を染めて無実の罪から人を救ったり、医学部在籍中に北極海でアザラシに助けられたり、そんなエピソードから学んだ知恵がホームズという人物を通して描かれています。同様に、彼の人間形成の支軸となった中世の騎士道精神は、そのままホームズにも受け継がれています。ヴィクトリア朝でさえ時に変人扱いされるその志を、ホームズは曲げることなく貫き通すのです。

本著は異色の「ホームズ入門書」であり、名探偵に自らの生涯を投影したコナン・ドイルの自己啓発本です。そして、「天賦の才能」+「努力」+「強い目的意識」で作家として大成功を収めたドイル＝ホームズからの激励のメッセージが多々詰まっているのです。

(いしざわ きり・カルチャー・サロン「ブティ・セナクル」主宰、手工芸研究家)

〈明治から昭和まで〉

日本の英語教育を彩った人たち

外山敏雄 著

四六判・248頁
本体2,100円＋税

[評者]

竹中龍範



日本の英語教育史

——誰がどんなことを

日本で英語が教えられ、学ばれるようになってすでに200年を超える。そこには数知れぬドラマがあり、成功・挫折が繰り返されてきたはずである。その歴史はどのようなものであったのだろうか。

本書は、「北国の港町 [=小樽] で」「[高等教員] 検定試験でわが道を切り拓いて」「人の世の悲しみ」「茨城ゆかりの人びと」「郁文館をめぐる」「書物と人と」「札幌農学校の光芒」「日本の英語教育史をたどる」の全8章から成るが、著者がこれまで諸誌に発表してきた論考に今回新たに書き下ろしたものを加えて、英語をめぐる人物史の観点からまとめられたものである。著者の経歴もあってか、北海道に関わりのある人物の比重が高くなっている。また、本書では喜安雅太郎『湖畔通信・鶴沼通信』への参照が多いが、『英語青年』の編集を40年近く務めた喜安の博覧強記に対する著者の信頼の篤さがうかがわれる。

本書に取り上げられた人物は、ラム姉弟を除いて、わが国の英語教育史上にさまざまな形で足跡を残している。中には札幌農学校の一期生でありながらこれまであまり知られることのなかった荒川重

秀を掘り起こすなど、これを多としながらも、さらなる調査にまちたい人物も含まれている。

本書掉尾を飾る第8章「日本の英語教育史をたどる」は、わが国の英語教育史の時期区分を試みている。歴史研究においてはこの時代区分と年表作成とがその研究者の史観を最もよく表すと言われるが、著者は、①英語教育の流れの変化は量的変化と質的变化の2つの要素に還元することができる、②時代の区分については、新しい動きが全体に浸透し、英語教育の流れが変わったことを見極めて期を画さねばならない、③わが国の英語教育史は中等教育と高等教育とを分けて記述されねばならない、という3つの点を踏まえつつ、明治の初年から1990年頃までを、中等教育は3期に、高等教育は4期に分けて、それぞれの時期の特徴を分析している。本章は独立に読むこともできるので、まず本章を読んでから他の章を読むと、日本英語教育史の知識がなくとも、それぞれの時代を背景として、いかなる人物がどのように活躍したかが捉えやすくなるであろう。

行文は滑らかで読みやすい。英語教育に携わる人たちがばかりでなく、英語教師をめざす若者にもぜひ一読を勧めたい。

なお、著者には旧著として『札幌農学校と英語教育—英学史研究の視点から』（思文閣出版、1992）があり、あわせて薦めたい。また、この新旧両著を読むうえで日本英語教育史の通史が理解されていればその読後感もいっそう深いものになろう。伊村元道『日本の英語教育200年』（大修館書店、2003）もぜひ読みたい。

（たけなか たつり・香川大学教授）

英語学習のメカニズム

第二言語習得研究にもとづく
効果的な勉強法

廣森友人 著

A5判・196頁
本体1,600円＋税

〔評者〕

小金丸倫隆



学習者の視点に立てば、英語学習 が変わる！ 授業が変わる！

「先生、英語を話せるようになりたいけど、どう勉強したら良いのでしょうか。」

英語教師であれば、一度は生徒からされる質問ではないか。本書には、そのような質問に答えるために必要な根拠やヒントがぎっしり詰まっている。

英語教師を対象とした第二言語習得に関わる専門書は数多く出版されているが、本書の大きな特徴は、英語指導者や研究者ではなく、あくまでも「英語学習者」の視点に立って書かれているということである。

具体的には、まず第1章と第2章で、第二言語習得研究の概要や習得のプロセスについて示された後に、第3章と第4章では、英語学習のインプット活動とアウトプット活動の「質」を高めるためにはどうすればよいのか、について紹介されている。活動の紹介では、具体的な教材を取り上げながら、なぜそれらが効果的であるのかについて、裏づけとなる理論をふまえながら説明されている。また、ありがたいことに、各章末には具体的な教材ソース（ウェブサイトや書籍など）が数多く紹介されており、明日からの英語学習にすぐ

に役立てることができる。

そして、学習者重視という本書の特徴を際立たせているのが、第5章から第7章までの後半部分である。これらの章では、「学習動機・学習方略・学習スタイル」といった英語学習を行う学習者自身に関わる要因に焦点が当てられている。一般的に良いとされている英語学習法も万人にとって良いとは限らない。それは、学習者ごとに学習スタイルや学習動機などに多様な違いがあるためであるが、本書ではそのような学習者ごとの違いをふまえ、個々に応じた英語学習を行うための理論やヒントが、わかりやすく示されている。これらの学習動機や学習方略といった、英語学習を行う学習者自身に関わる要因は、英語の教授法や活動など「教える側の要因」と対比して、一般に「学習者要因」と呼ばれる。第二言語習得の分野でも、近年注目を集めつつある分野であるが、著者である廣森氏は、まさにこの「学習者要因」の分野で、国内外の第一線で活躍している研究者であるので、本書には最新の研究成果が凝縮されていると言えるだろう。

また各章末には「4技能で一番重要な技能とは？」「英語学習と性別は関係があるのか？」といった、英語学習に関する素朴な疑問について扱ったコラムも掲載されており、いずれも非常に興味深い。

効果的な英語学習方法を理解するためだけでなく、生徒一人ひとりに応じた英語指導を行うためにも是非一読しておきたい、英語教師必携の一冊である。

（こがねまる みちたか・

神奈川県立光陵高等学校教諭）